

【小学生高学年の部】



会津のハンサムウーマン

会津若松市立謹教小学校

六年 野中律

海老名リン先生は、私が通っていた若松幼稚園をつくった方です。幼稚園のお遊戯室には、リン先生の写真がかざってありました。幼稚園の年長のころ、遠足でリン先生が眠る

浄光寺に行きました。浄光寺には、リン先生の石像があって、幼い私は、「リン先生はどんな人なのか。やさしそうだな。」と思ったのを覚えています。小学生になり、リン先生の事をよく知りたいと思い、調べました。会津藩士の家に生まれたリンは、十七才で海老名季昌の妻になります。季昌は戊辰戦争のろう城戦で、北出丸の指き官として戦いました。その時、会津にいなかったリンは、夫が守る鶴ヶ城にろう城できなかった事を悔やみ、自刃しようとしてしまいました。結局会津藩は負けてしまい、季昌は東京で謹しんを命じられ、斗南藩へ移住したリンは、食べ物もろくに無い苦しい生活を送りました。夫の謹しんも解け、江戸に来たリンは、昔からの日本の「男尊女卑」という考え方は違うキリスト教の「男女平等」という考え方に感動し、熱心にキリスト教を信仰します。夫からもう反

対されませんが、信仰を貫き、その熱心に心を動かされた夫もキリスト教徒になります。ある日、友人から幼稚園の経営をいらされたリンは、改めて幼児や女子への教育の必要性を知ります。会津に戻ってからは、私立若松女学校と私立若松幼稚園を造りました。「男女平等」の考えを大事にしてきたリンは、福島県で初めて「保母」の資格をとりました。このリン先生の生がいを学んで、強い信念を持った生き方だと感じました。この時代の女の人は、「男尊女卑」の考え方が強い世の中で、苦しんできました。私は、女性というだけで、生き方が制限されてしまうのはつらいことだと思えます。でも、強い信念を持って生きた女性たちが会津にはたくさんいました。新島八重さんや大山捨松さん、もちろん海老名リン先生もです。この女性たちは、苦しいことがあっても希望

を捨てず、夢を持って、努力してその夢をかなえています。世の中を見る正しい目と、決してゆるがない強い意志を持っています。私はその生き方に心を打たれました。ハンサムウーマンだと思います。私は、これらの会津の女性たちのような、強い信念や夢はまだありません。でもいつか、私も努力して夢をかなえて、人の役に立ちたいと考えています。海老名リン先生は、子供たちのために幼稚園や学校をつくり、今もその幼稚園ではたくさんの子供たちが学んでいます。自分のしたことが、未来につながっていくのはとてもすてきなことだと思えます。私は、これからのいろいろなことを勉強して、自分の夢を見つけ、会津の女性たちのように生まれ育った会津や世界にこうけんできる人になりたいと思います。



二人の女性がら学ぶこと

会津若松市立謹教小学校

六年 佐々木望奈

なよ竹の風にまかす身ながらもたわめぬ節はありとこそ聞け

毎年十一月に行われる私の学校の学習発表会「しらはぎ祭」で歌われるこのなよ竹の歌は、西郷千恵子がよくんだ歌だということは知っていましたが、どういう意味がこめられているのか分からなかったため、今回調べてみました。

千恵子は、会津藩の家老・西郷頼母の妻であり、戊辰戦争の激戦の中、自決をして命を落とした女性でした。この歌には小さくて細い弱竹のよ

うに、私は時代の風に身を任せてきた。しかし、弱い竹にも決して折れぬ節があるというような意味があることが分かりました。なよ竹の歌を歌ったときに感じた暗く、重い感じは千恵子のつらい決意と悲しみからきているのだなと思えました。千恵子は、女がいては戦の足でまといになると思い、むすめ五人、義母、妹もふくめて二十一人でやしきで自刃しました。その中には、二才と四才のむすめもいたそうです。まだ幼いのにならなければならぬのはかわいそうだなと思えました。それほどまでの千恵子の武家の女としての強い決意を感じました。武家としてのまっすべな思いに私は、心をうたれました。

千恵子とは異なり、戊辰戦争で実際に戦いに参加した女性がいます。山本八重です。てっぼうと刀を持って鶴ヶ城に入り、男といっしょになって戦った八重と千恵子は正反対かもしれないけれど、共通しているところもあるように思えます。小学一年生のときに学校で教わった「あいづっこ宣言」のもとになっている「仕の掟」があります。そこに「ならぬことはならぬ」という言葉があります。千恵子も八重もそれ

歴史のこぼれ

戦争回避の努力 — 西郷頼母

会津藩は、京都守護職をすんなりと受け入れた訳ではなかった。幕府の台命が下ると、筆頭家老の西郷頼母は「まきを背負って火中の栗を拾うものだ」と強固に反対し、その後も京都まで赴いて松平容保に京都守護職の辞任を言明したために家老職を罷免されている。また、家老に復帰後、西郷は自ら指揮を執った白河口の戦いが大敗するなど、とかく「弱虫」「卑怯者」というレッテルが貼られることが多い。

しかし、その西郷が戊辰戦争の詳しい戦略について述懐した最晩年（明治32年）のインタビュー記録がこのほど、県立博物館収蔵資料の中にあることがわかった。元会津藩士の渋谷源蔵が聞き書きした「保科藩老戊辰戦略談一片聞書」。同館の阿部綾子学芸員は「一貫して愛する古里が戦火に巻き込まれないように、西郷頼母は戦争回避を模索し続けた」と解説する。しかし、戊辰戦争で戦火が会津におよぶと、西郷邸では妻の千恵子をはじめ一族21人が悲惨な自刃を遂げることになる。

参考：平成30年4月22日、福島民友新聞「戊辰戦争150年特別企画」



広沢安任と斗南藩

会津若松市立鶴城小学校
五年 山本 真紀

磐越西線、東北新幹線、そして青い森鉄道乗りついで、会津若松市から青森県三沢市まで約五時間。

私の母の故郷の三沢市には、会津で生まれた『広沢安任』の資料を展示している『斗南藩記念観光村・先人記念館』という歴史資料館がある。祖父の話にも、時々名前が出てくる。父の故郷である会津の広沢安任とは、どういう人物なのか、なぜ遠くはなれた三沢で有名なのかな、と私はとても不思議だった。

昨年、四年生の総合学習で飯盛

山を訪れ、戸ノ口堰洞門等会津の歴史について学んだ。(そうだと、広沢安任について調べてみよう。)

広沢安任という人物は、現在の青森県の基礎を作った斗南藩の実力者だったそうだ。

松平容保が京都に行った時、安任も京都に入り、会津の外交の仕事をした。戊辰戦争後、安任は、山川浩、永岡久茂と共に、リーダーとして斗南に向かう。斗南は不毛の地。命を落とす者も多かった。安任は、藩の財政に力を尽くした。廃藩置県の後、安任は斗南にとどまり、現在の三沢市に、日本初の洋式牧場『開牧社』を開設し、青森県だけでなく、日本の畜産業に大いに貢献した。

明治政府で仕事をしてほしい、という中央からの要請を何度も拒否し、『野にあって国家に尽くす』の信念で斗南の開拓を続けた安任。「これは会津藩士の義の精神だろうね」と母が言った。私にはむずかしいが、会津と青森の誇りだなあ、と思う。

祖父の本家のある東通村と親戚のいるむつ市に行く時、祖父が運転する車の窓からは、お釜を被ったような釜臥山が見える。斗南へ

の移住を命じられた会津の人々は、この釜臥山を故郷の飯盛山だと思いい、陸奥湾を猪苗代湖と思い暮らしていたそうだ。人々は、どんなに悲しかっただろう。人々は、どんなに苦しかっただろう。きっとまたいつか会津へ戻れると信じ、辛くきびしい日々を乗り越えたのだと思う。

また、途中には、『斗南藩史跡地』『秩父宮両殿下御成婚記念碑』があり、何度か立ち寄ったことがある。この記念碑は、会津藩士の子孫たちで作る斗南会津会が中心となって建立された説明が書いてあった。

「安任の時代から今までには、青森県知事になったり、むつ市長、三沢市長になったり、また多くの学校で校長先生になったりと、活躍した会津ゆかりの人がたくさんいる」と祖父から聞いた。

私のルーツのある会津と青森が歴史の中で深くつながっていたということがわかってきた。私はこれから会津の歴史をしっかり学んでいきたいと思う。同時に広沢安任のことも覚え、伝えることは、少しでも私のお墓は会津若松市と三沢市にある。



瓜生岩子のようにになりたい

会津若松市立城西小学校
六年 高橋 咲葵

私は瓜生岩子のようにになりたい。なぜならば、瓜生岩子は幸せな生活から一気に不幸な状況になってしまった。めくまれない人や不幸せな人のために生きていこうと尽くした人で、私だったら、落ちこんだ時、立ち直れず、とても瓜生岩子のような気持ちを持ってないと思っただから。

瓜生岩子は、喜多方に生まれ、裕福な家庭で育ち、結こん、出産と幸せな人生を送っていたのに、同時期に愛する夫、母と伯父も亡くしてしまったが、和尚さんの言

葉に救われ、その後の人生を身をけずって人々に尽くした人である。戊辰戦争では、敵味方関係なく負傷者を手当てし、鉄ぼうのたまをかいくぐって人々を助けたそう。戦争によって両親を亡くした子供たちを引き取り、学校をつくり、読み書きそろばんを教え、子供たちに食べさせる食料がなくなると、自らが着ている着物を売ってお金にかえるなど、人々のために役立つことをされたそうだ。瓜生岩子の行動は、当時の皇后陛下にも知らされ、藍綬褒章を受けた。藍綬褒章とは、特に教育医療、社会福祉などの分野において、長年の努力により、人々の利益にこうけんした者に授与されるそうだ。人々に尽くした瓜生岩子にふさわしい授章だと思う。

今の私は、余裕がなくて、自分のことだけで精いっぱい、瓜生岩子のように人のことまで気にかけることができない。だから、自分自身のこともしっかりやって、周りのことにも気が付いて行動できるようにしたい。そのために、学校では、何事にも積極的に関わり、自分の係や担当でなくても、例えばプリントや



当時の板東俘虜収容所

大正七年、松江豊寿の「第九」が響いた!

第一次世界大戦真ただ中の大正7年(1918)6月1日、徳島県鳴門市にあった板東俘虜収容所でベートーベンの交響曲第九番の歌声が響きわたった。収容所の所長は、会津藩士の子で陸軍中佐だった松江豊寿。収容所長に就任すると、松江はドイツ人捕虜を「人道的に処遇すべし」という信念を貫き通し、捕虜たちはあけて歓喜に満ちた「第九」を全曲演奏にいたる。日本で「第九」が演奏された最初の瞬間である。

のちに松江は大正11年から第9代の若松市長を務め、昭和4年に実現する上水道の敷設に手腕を発揮した。また大正14年には、飯盛山にある白虎隊墓域の拡張事業にも尽くした。平成18年、松江を主人公とする映画「バルトの楽園」が製作され、全国で公開された。奇しくも平成30年は、大正7年の「第九」演奏から100年という節目にあたった。

松平勢津子さま御成婚の喜び

「その日、昭和3年の9月28日、秩父宮と松平勢津子姫とのご婚儀が行われた。戊辰戦争で朝敵の汚名をうけた旧会津藩主の血をつく姫が、秩父宮妃殿下になられたのです。…市民のなかには朝敵と呼ばれたことへの無念が、まだ心のどこかに残っていた。だから、ご婚約が発表されるとその喜びは大きかった。市では3日間にわたる慶祝行事を行い、昼には小学生の小旗行進、夜には市民の提灯行列が街をねり歩き、暗夜を明るく彩った」

明治戊辰100周年を記念した昭和42年9月15日の「市政だより」は、戊辰戦後の会津が歴史の大きな転換点に立った当時の喜び、興奮をこう伝えている。

勢津子姫は、当時駐米大使だった松平恒雄(旧会津藩主松平容保の六男、外交官のちに宮内大臣、初代参議院議長を務める)の長女で、松平容保の孫にあたる。勢津子姫が秩父宮殿下に嫁ぐことが決まると、ようやく天皇家に対する「朝敵」「賊軍」の汚名が晴らされた――と会津の人々は心から欣喜した。今日、ゆかりの御薬園・重陽閣に妃殿下の御威徳と功績を後世に伝える品々や写真などが展示される。

ノートを配ったり、困っている友達がいいたら声をかけるなどしていきなりたいと思う。また部活では、六年生になってからは、先ばいとして後はいへのアドバイスなどほめてくれると思うが、逆に後はいの気持ちや意見を聞き出せないのになやみである。誰でもなんでも話せる雰囲気づくりをしていきたいと思う。また地域で見守ってくださっている方々に対しては、感謝の気持ちはあるが、自分からあいさつができないし、あいさつをしたとしても明るくあいさつができないので、自分から明るくあいさつをし、地域で行っているボランティア活動があったら、私も参加

して、感謝の気持ちを伝えたいと思う。そして家では、家族の手伝いを積極的にやりたいと思う。つい、やらされている、やらなくてもやってももらえる。と思ってしまうのだが、お手伝いをして家族を助けたいと思う。私は、まちがったことをしたくない、完ぺきにやりたいと思ってしまう。たりたり、めんどうなことをあまりやりたくないと思ってしまう。たりするので、まず、何事にもおそれず、がむしゃらにやってみようと思う。そして、私も瓜生岩子のように少しでも人々の役に立てる人間になりたいと思う。

【中学生の部】



大切な一步は会津がり

会津若松市立北会津中学校
三年 坂内 愛莉

私は私の故郷を誇りに思います。会津は大きな都市ではありませんが、会津の誇りは何と言っても、全国で活躍した先人です。会津の先人はいろんな分野で多くの人が名を残しています。私が生き方を学んだ先人は松江豊寿です。松江さんの何から生き方を学んだかと言うと、人間を全員平等に扱う美しい心からです。

松江さんは歴史の教科書には載っていませんが、教科書に載るくらいの人だと私は思います。

私は去年、会津ジュニア大使として松江さんのことを学びました。それまでは全く知らなかった松江さんですが、この体験をしてから、私の憧れのような存在になってい

ます。その理由こそ、松江さんの行動です。第一次世界大戦時、日本の敵国であるドイツの俘虜に対し、松江さんは人道的な扱いをしました。敵であるのに、私だったらどうでしょう。きっと力の差を見せつけたくなってしまいます。これは松江さんだからこそ、本当のやさしさを持っているからこそできることです。板東俘虜収容所での出来事以来、ドイツの俘虜たちは、帰国してからも松江さんを愛していました。このことを学び私は感激しました。多くの人から愛された先人が私たちと同じ会津人だと思うとうれしくなってきました。そこで私は考えました。簡単に松江さんのような生き方をしたいと言いますが、それはとても難しいことです。松江さんのような生き方をするには、松江さんと同じような心で自分を見つめてみましよう。

十人十色というように、人間性

格も考えもさまざまです。だから同じ生き方をするのはなく、生き方を学びます。温故知新です。そこから学ぶことは多いはずですが、私も考えてみました。松江さんのやさしさの原点はなにか。その答えは松江さんに限らず、会津の先人みんなに共通していました。それは、思いやりです。他人の気持ちを考えてことです。これは簡単に言えますし、実行しやすいことには思いますが、とても難しいことではないでしょうか。例えば、誰かがいじめられています。すぐに止めに入れますか。私もなかなか、一歩が踏み出せません。もしその一歩が踏み出せたなら、きっと松江さんに、会津の先人に一歩近づけるのではないのでしょうか。今の私ではとても足元にもおおよびませんが、誰だって最初から完璧ではないのですから。まずは自分を見つめることです。そして何が自分のできるのか。落とし物を拾って届けるだけでも思いやりなのです。自分が動けばどこかで誰かが笑ってくれる、とても幸せなことですね。私がこんな風に考えられるようになったのも、思いやりを見つ



会津人の魂にふれて

会津若松市立北会津中学校
三年 金子 弥生

私は、去年の夏に、ジュニア大使として、徳島県の鳴門市に訪問させていただきました。実は、鳴門市と会津若松市は姉妹都市という深い関係ももっています。そんな深い関係も作ってくれた我々が誇る人物は、松江豊寿さんです。私は、この作文を通して、松江豊寿さんから学んだ会津人としての魂を伝えたいと思います。

松江さんは、第一次世界大戦中に板東俘虜収容所の所長を務めていました。その収容所にはたくさん

入っていました。私は、最初、俘虜所だからかなりひどい仕打ちを受けてそこに捕えられていたのだらうと考えていました。しかし、徳島県を訪れて、その考えは百八十度変えられました。松江さんはその俘虜所でドイツ人俘虜たちに人道に基づいた待遇で接し、可能な限り自由で様々な活動を許したのです。例えば、俘虜所の中に多数の運動施設、酪農場を含む農園、パンを焼くための竈、野菜の農園などの施設を設けました。そのおかげで元民間人の俘虜たちは様々な職業を営むことができました。他にもボーリングができる娯楽施設までありました。その時代としては、ありえないことばかりであふれる俘虜所でした。なぜ、松江さんはこんなにも人道的な人物になったのでしょうか。そのきっかけは戊辰戦争にありました。かつて、会津藩は戊辰戦争で敗れたことがあります。その悲哀な経験を味わった会津藩士の子弟に生まれた体験が大きく彼の良心的な人格形成に影響されたといわれています。たくさんの方々が悲しみを味わったからこそ、その過ちをまた繰り返さないように

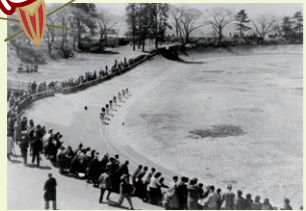
する松江さんは本当に誇りに思えます。そんな松江さんは、他にも俘虜たちに地元の住民と交流をさせたりしました。この時、ドイツ人俘虜によって、日本で初めてベートーベンの交響曲九番が演奏されました。誰もが知っている有名な曲です。そして、ついに、第一次世界大戦が終了し、それと共に板東俘虜収容所も閉鎖されました。しかし、俘虜たちは解放された後も、俘虜所で受けた温かい扱いを忘れず語りました。「世界のどこに松江のような素晴らしい俘虜収容所長がいたんだろうか。」

彼らは、一生忘れない松江さんの会津人の魂を感じたのです。

私は、松江さんを通して、戊辰戦争があったからこそ、その会津人の魂は今も受け継がれているのだと思います。人道があり、国境を越えて愛されている彼を見習うよう日々、二〇一八年の平成の会津人としてその魂をやどらせていきたいと思っています。



戦後、窮乏する市財政を救った会津競輪



戦後、窮乏化する市財政のなかで、昭和23年(1948)9月には新制中学校四校、すなわち第一中学校～第四中学校の新設の財源として、旧城址本丸に競輪場を誘致することが決議された。会津のシンボルとしての鶴ヶ城を破壊して、お城のど真ん中に競輪場を設置するという話は内外からの反対をよんだ。しかし、史跡保存のため文部省から施工前の状況に復すること、五年間の時限を定める等の条件付きで認可された。

会津競輪は、昭和25年4月に第一回が開催され、年八回実施された。予想外の収入により市の財政は危機から免れ、そのため、新制中学校四校の校舎建設の財源が確保できた。のち昭和33年3月には小田垣地域に移転し、同38年まで競輪が開催され、結果的には市財政を救った。

参考：会津若松市史10「会津、戦後から明日へ」より



「義の想い」をいつまでも

福島県立会津学鳳中学校

一年 小貫 蒼依

「義」の想い。つなげ未来へ。
ご会津が戦いの舞台となった戊辰戦争から今年で百五十年を迎える。そのキッカチフリーズこそが初めに述べた言葉である。この中に入っている「義の想い」とは会津人たちのどんな想いのことなのだろうか。

もう一つ、疑問に思っていることがある。この戦争では多くの人が亡くなったわけだが、なぜ幕府や藩主という赤の他人のために命を落とせるのだろうか。身分が低い農民などの人々は格上の藩主など、顔も見たことのない存在だろう。現代人の私たちからでは

想像もできない。そんな彼らの心情を知りたい。そう思って興味を持ち始めた。

江戸時代、三代将軍・徳川家光の異母弟である保科正之公を初代藩主に持つ会津藩は徳川家の親藩。また、教育熱心な藩でもあり、有名な藩校・日新館を建設している。そのため、幕府からの信頼も厚く、会津藩は二十三万石の親藩として、幕末に及ぶ。

時は流れ、長らく鎖国していた日本は、外国から「開国しろ」と迫られるようになり、日本近海に異国船が出没するようになる。そこで、会津藩は自ら出兵を幕府に願い出た。そして国防の第一前線として活躍していく。あの「ペリー黒船来航」の際も警備にあたっていた。また、幕府を倒そうとする倒幕派が「天誅」と称して要人を襲うテロが京都でおこるようになる。京都守護職」という京都の警備の最高責任者に就任し、治安を守った。そのため、幕府と天皇という日本のトップとどちらにも信頼を得た。九代藩主・松平容保公はこの行いにより、孝明天皇より「宸翰」という天皇直筆の手紙と「宸翰」という天皇直筆の和歌を与えられた。容保公はこれらを人目に触れさせず、いつも肌身離さず持ち歩いてきたという。



山川捨松に学ぶ

会津若松市立河東学園中学校

三年 福原 さへり

皆さんは、山川捨松という女性を知っているだろうか。

彼女は、十一才のときに日本初の女子留学生としてアメリカに留学し、帰国後、慈善活動や女子教育を支援した方だ。ちなみに、捨松という名前は、留学するとき、捨松の母が「娘を一度捨てた気で待つ」という意味をこめて改名した名前だ。

私は、山川捨松から二つのことを学んだ。
一つ目は、強い心を持つということだ。
捨松は、留学中ホームシックにも

ならず、十年間という長い期間をアメリカで過ごした。また、自らが始めた慈善活動や女子教育も最後まで遣り遂げた。

私は、捨松のように強い心を持って最後まで物事を遣り遂げたことは一度もない。勉強や部活などで嫌なことがあったり失敗したりすると、「もうダメだ」とあきらめてしまうことが多くあった。強い心を持って最後まで遣り遂げたい。

二つ目は、人を助ける優しい心だ。捨松は、戊辰戦争のときの籠城戦で「焼き弾押さえ」という危険な作戦を取っていたときに大怪我を負った。そして、留学から日本に戻ったときに、大山巖と結婚した捨松は、日清、日露戦争の際に戊辰戦争のときの自らのように大怪我をした人たちの救護を行った。
困っている人や悩んでいる人を見かけたら助けることがこれまでできていたのだろうかと考えたときに、私は、その人たちのことを見て見ぬふりをしていないということのほつが多

だがこの後、十四代将軍・家茂が亡くなり、立て続けに孝明天皇も亡くなり、倒幕派の新政府軍と、それを阻止したい旧幕府軍との戦いが始まり、幕府軍は追い詰められ、ついに大政奉還をして戦いを終わらせようとしたが、新政府軍は明治天皇に、にせものと見られている「幕府やそれに協力している会津は賊軍である」という手紙を出し、汚名を着せた。

その後戊辰戦争が始まってしまい東北諸藩は必死に戦ったものの、次々に降伏。会津藩は孤立したが、それでも約一ヶ月間籠城し、抵抗し続けた。戦いではまだ十六、十七歳の少年達からなっている白虎隊までもが前線に投入され、若い命を落とす。また、女性や若人、幼い子供は足手まといになるまい、と次々に自刃していった。これにより亡くなった女子は約二百三十人、その他約百人、実際はこれより多いと言われる。鶴ヶ城開城時、ここまでの会津藩の戦死者は約三千人以上。遺体は新政府軍の命令により野晒しとなった。旧幕府軍全てを合わせれば約四千六百九十人となる。こうしてたくさん犠牲を出しながら会津での戦いが終わり、その後の五稜郭の戦いを最後に戊辰戦争は終結し、明治維新は行われた。

会津藩はこの戦いに敗れた後、天皇にそむいたとして朝敵、賊軍と汚名を着せられたり、教科書に悪く書かれたりなど、辛い冬のような時期を過ごした。江戸時代からずっと日本のためにつくしてきたのに、である。
そんな会津藩のことを私の祖母は誇らし気に、
「会津藩は義の心を持った、忠義の藩だ。」

と語っていた。なのに、私は何も知らないのに、「負け戦だから」と知ろうともしなかった。そんな人は多いのではないかと。誇りなど持ってもいない。それではいけないと思う。先人たちの想いを、この機会に知らなければいけない。強い逆風の中、強い意志を持って生きた先人たちに敬意を持ち、理解を深め、誇りを胸に生きていかなければいけないだろう。

今年で戊辰戦争から百五十年を迎える。これを機に様々な人々にこの歴史が伝わって義の想いを誇る会津人の心に気づいてほしい、そう強く思う。
「義」の想い、つなげ未来へ
会津の義の心。それは、なにかあってもめげずにまっすぐ前を向き、自分が思う正しい道をつき進んでいく、ということだろう。

いのではないかと思った。捨松は、戊辰戦争のときに自分の敵だった人たちのことも分け隔てなく助けている。私も捨松のような全ての人達に温かく優しく接することができる人になりたい。
捨松は生まれながらに才能を持っていたのではなく、きつと多くの努力をして、とても強い心ととても優

しい心を手に入れたのだと思う。会津から捨松のような素晴らしい女性が日本だけでなく世界でも活躍していたことを私は誇りに思う。
私は、将来、捨松のような常にならぬことをよく考え、何事にも最後まであきらめずに遣り遂げることができる人になれるように多くの努力をしていきたい。

会津若松市子ども会育成会連絡協議会のあやみ

会津若松市子ども会育成会連絡協議会は、戊辰150年の今年、結成から66年目を迎えます。年々少子化傾向がありますが、子どもたちを健やかに育てることは、あらゆる時代を超え、変わることのない社会の要請であり、子を持つ親の切なる願いであります。

会津藩校日新館以来、会津若松市は社会教育による人材育成に力を入れてきた歴史と伝統があり、私たちはそのことを誇りとしています。

本会では、会津ゆかりの地での子ども達の研修をはじめ今年で30年目になります。この活動を長年続けているのは全国でも会津若松市だけです。なぜできるのか、それは会津の先人の方々が全国で活躍し、足跡を残された実績と歴史によるものです。子どもたちが、その先人の方とゆかりある市町村での交流を通して、自分の故郷の歴史を継ぎ、日常生活で忘れがちな協調性、創造性、積極性を自然と身に付け、同時に会津の歴史を学び、郷土愛を育みます。

年々市内子ども会が少なくなり、様々な課題を抱えている中で大切なことはいつの時代でも地域での子ども育成です。

戊辰戦争から150年の今年、会津の先人の方々が繋いできた会津の歴史への誇りを、未来を担う子ども達に伝えていかなければなりません。

白虎隊士が貫いたしの精神を基に、子ども達の健全な成長を子ども会として努力し、見守り続けたいと思います。



提灯行列